

十月二十一日

昨日は、山口勝弘先生に会って、別れた後、静かな驚きが襲いかかり、一日それに身を任せた。文章にして残そうと考えたり、形にしておこうと思ったり、色々としてみたが不可能だった。この驚きは、とても大事な事のように思うので、必ず、何かに残したい。少し時間がかかるであろう。芸術家の存在をあんまり、というよりほとんど理解できないでいた。しかし、昨日の山口勝弘は、そんな私にこれが芸術であり、芸術家なんだと、良く知らしめたのである。山口勝弘が病に倒れて、多摩プラザに自らを幽閉してから何年になるのだろう。何度かお邪魔して話しをうかがった。昨日の感動はそれらが集積してのものだったのかも知れない。ポーツと解らぬままに体験していたモノがある日明晰にその姿を現す事があるらしい。昨日がそれであった。

エドモン・ダンテス（モンテクリスト伯）の如くに自らを多摩プラザに幽閉し、身体が不自由になってからの山口勝弘に強い関心はあった。それ以前の山口勝弘は日本には稀な強固なアバンギャルドであった。しかもエリートでもあった。幽閉後の山口からは健全な肉体が去り、現実にも所有していた自由も去った。しかし、精神の自由、あるいは自由な精神は山口から去ろうとはしなかった。何者もそれを侵犯する事は不可能なだった。勿論それは老芸術家の我執とは余りにもかけ離れたものであった。

山口勝弘は滝口修造氏等の実験工房のメンバーであった。滝口修造の知性の総体が実験工房の枠組みをゆるやかに価値づけてい

たと思われるが、その、ある種の知性による芸術的倫理観の如き世界観は日本の有象無象の近代運動ではひとときわ光彩を放っていた。

昨日、山口勝弘の部厚いスケッチブックをのぞき見て、私は山口の中に流れ続ける滝口修造的世界を初めて実感した。私が山口勝弘の多摩プラザの小屋で魅入っている彼の絵と、シルクスクリーンと、そして山口のスケッチブックの多様な記録、そして色んな展覧会のカタログ、つまり大山口のキャリアという歴史が、彼の不如意な今の身体故の極小空間にメディアとして溢れ返っている。空間には（建物の）意味はない。そこに充ちるメディアの光芒こそが実体なのであった。

幽閉の身体自由な精神は山口勝弘の宿命でもあった。怠惰に弛緩した自由は本格的な価値を産み出さぬ事が多い。山口勝弘の表現活動も五体満足の壮年期までは、日本には稀な知的倫理性を備えていたが、やはりアバンギャルドの限界を出る事はなかった。マレーヴィツチの至高主義への共感を度々山口から聞いたが、その至高主義はそのまま、日々の生活、身体からの遊離主義でもある嫌いから逃れられぬ。山口勝弘が身体からの遊離、多摩プラザに幽閉されてからの全ての活動に着目するのは、彼の至高のアバンギャルド性が人生の宿命とも考えられる自然な成行きによって開放されつつあると感じたからである。

山口の今のドローイングは壮年の活力と技術に満ち溢れたものではない。稚拙では無い、古拙でもない。しかし、アア、うまいなどと思わせるものでは決していない。どんなアバンギャルドの作品でも身体エネルギーと五体のテクニクに支えられているものは少なくない。その点、今の山口の作品にはそれが無い。しかし、描く、イマジンする山口の精神の自由はたぎり返っている。それ

だから、山口の今の作品は精神そのものが画筆をあやつっている如きが明らかにある。

人間の生命は身体だけに宿るものではない。近代芸術、あるいはより狭義に前衛精神も然り。それは時に病み、傷ついた身体から産み出される事もある。

山口の多摩プラーザ幽閉生活から産み出されつつある生命の自由への讃歌とも呼びたい連作に着目するのはそれ故である。

老人の智恵と子供の身体が産み出す、新しい世界がそこにはある。

生老病死の宿命から誰一人として自由にはなれぬ。

しかし、山口はその精神の至高力によって、自分の身体を口ポット化し、精神の力で、ある身体の未熟状態をパフォーマンスしてみせているのである。

十八時広尾フィンランド大使館、フィンランドセンターでソタマ教授、栄久庵、島崎両氏と打合せ。十九時過迄。栄久庵さんの道具寺プロジェクト進んでいるようだ。フィンランドのプロジェクトはフィンランドの事情もあり、ゆっくりゆっくりと焦点が絞られてゆく事を願いたい。中国の力を巻き込めると良いが。二〇時半世田谷村に戻る。